

第17話 「Thanks for キ・ガイ」 1

やあ、昨晚アリスちゃんの手で徹夜したブロンズだよ。おはよう。今日は十一月の第四木曜日、アメリカの祝日「感謝祭の日」。この日はみんながクリスマスに向けて準備を始める日なんだって。

そんな訳で朝から教会は慌ただしい。

みんなが街に繰り出すんだってさ。

んじゃ、僕も荷造りするか……ん？ちょっと待って。

外には殺し屋とかがうようよいるんじゃ……

「ああ、その点ならもう大丈夫だよ」クロアは言った。

なんでも、市長さんが殺し屋たちのアジトに手紙を送りつけたんだって。

- 私の財布に手を出した奴らは全員ナパームで焼き殺します？

市長より愛を込めて

さすが市長さん。太っ腹。

という訳で僕たちはちょうどお昼時、街に向かって車（装甲車）を走らせましたとさ。

第17話 「Thanks for キ・ガイ」 2

街でもクリスマスの準備が始められていた。街路樹に色とりどりのライトが巻き付けられ、立ち並ぶ店にはクリスマスツリーが飾られていた。

車（装甲車）から降りた僕ら。

雪がぼつりぼつりと降っていた。吐息が白い。もう少しで十二月なんだというのを実感させられる。

「寒い……」

黒いジャンパーにジーンズ、とボーイッシュにキめてきたクロアが僕に寄り添ってきた。

と共にダウトもやってきた。

「やーい、やーい、リア充死ねお！リア充死ねお！」クロアに中指を立てながら脳なし猿みたいに円周する。「ヒュー！ヒュー！ブルンズ！！デキ婚だけはすんなよな！！こいつお前とやる事しか頭ん無えからなア！！」

ここでクロアが反撃に出た。

「Fuck'n pussyyy！！！！うつさい厨二！！殺す事しか頭がないアニヲタキ・ガイめ！！」

「なんだア！？ヤんのかテメエ！？コラ！！ええ！？」

「えつ。公衆の面前でヤんの……？アンタそというのが好きなんだ……アタシも好きだけど」

「……………」

戦意喪失したダウト。

――そうだ、忘れてた。コイツは完全なる変態だ。

第17話 「Thanks for キ・ガイ」 3

「はい、キチガイさん達、終わったかな」リカルドがスリッパを持って地面と水平移動する。もの凄い剣幕の笑顔だ。「終わったよな？終わったよな」

「……はい」

「ハイ、終わったね……じゃあ、糞ビッチ、あとヲタ。指令だ」リカルドはマントの懷から二枚の小さなメモ用紙を取り出した。それらをクロアとダウトそれぞれ一枚ずつ手渡す。「ビッチ、お前はクリスマスツリーを、ヲタ、お前はライトを適当に買ってこい。俺はアフロの新調をする。アーユーオーケー？」

「は？アーユーホーケー？イエス」

「んもおおおおお前黙れ！！畜生！！金渡してやるから早くツリー買って来い！！」

「はい」

「その金、ラブホに使うなよ！！」

「……チエツ、ケチ」クロアは舌打ちして中指を立てると、人ごみの中に消えていった。

第17回 「Thanks for キ・ガイ」 4

「つーことでお前早くライト買ってこい、ヲタ」リカルドがダウトに目を移した。

「クソったれめ、分かったよ……あつそうだ！テメーこそ俺にブルーレイデッキ買えよ！！観たいアニメが溜まってんだよ！！」

「いい歳こいて何がアニメじゃああああ！！てめえふざけんな！！」

「デッキ買わなかったらライトも買わねえ！！」

「てめえは五才児か！！まあいいだろう、買ってやるから早くライト買え！！」

「話分かるじゃん、んじゃ金」

「ほらよ」リカルドはダウトに素っ気無く百ドル札を手渡した。

「んじゃ、行つてくつぜ。……勘違いすんなよな！！別にお前の為に買ってやる訳じゃねえんだかな！！」

「俺はクーデレ萌えじゃああああああ！！さっさと行け！！」
そうしてダウトも人混みの中へ紛れていった。

第17回 「Thanks for キ・ガイ」 5

「さてさてブロンズ君。君はかわいいかわいいターキー七面鳥を買ってきなさい」

「えっ？ターキー？七面鳥の事？」ブロンズは聞いた。

「そうだ。今夜のパーティの主役だ。とびきりデカいの買ってこい。これ金な。……おっと。お前、道とか知らねえだろ？つーわけで俺の愛しのアリスた〜ん、ブロンズの道案内頼む」

「は〜い」アフロの中からアリスがひょこつと出てきた。地面へ降り立つと、ブロンズの元へ駆け寄った。

「んじゃ頼むぜ！二人共！あつ、ブロンズ！俺のアリスさんに色目使ったら承知しねえからな！？アリスた〜ん、愛してるよ〜！！」ブロンズ班とリカルドは互いに手を振って別れた。

そしてリカルドは新しいアフロを調達しに、ダウトのブルーレイを買ったために、独り、走り始めた。

第17回 「Thanks for キ・ガイ」 6

まずリカルドは理髪店へ向かった。
アフロを直す為だ。

今の彼のアフロはお椀形をした奇妙で悲惨な形状を成している。
人前に出るのが恥ずかしいくらいだ。
赤面しながら全速力で走る。

リアルド達は、街に来る前にあらかじめ「落ち合うのは五時」と
決めて来た。

今現在の時刻は二時。

つまり、リカルドはあと三時間でアフロを直し、ブルーレイを
買わなければならない。

大忙しだ。

五分走り続けてようやく店に着いた。

行きつけの理髪店だ。

店の名は「発破屋」。

「ハーイ、ボーイ！！何か用かネ〜〜！？」

リカルドが店の入り口で店主の名を叫ぶと、店内からテンション
超爆なMR・Jが現れた。

「J、いつもので頼む！！手早くな！！」

「アイアイさ〜〜」

次の瞬間、口ハネの街が一瞬閃光と轟音に包まれた。

第17回 「Thanks for キ・ガイ」 7

アフロが完全復活したりカルドはブルーレイを買うため家電量販店へ。

自動ドアをくぐり抜け、店内へ。すると、エアコンやらパソコンやらといった、ありとあらゆる家電が陳列される巨大なマーケットが現れた。

適当なブルーレイデッキを手に、レジへ向かう。

しかし、一つ問題が。

「……なんだこりゃあ？」

リカルドが目当たりにしたのは一本の赤いライン。店の端から端までを一直線に結んであった。そしてそのラインを越えたところすぐに立っているのは警察官。

警察官に尋ねてみると、このラインから一歩でも出たら逮捕する、とのこと。

……カンのいい読者は気がついただろう。

そう。この店、店のど真ん中に口ハネと口サンゼルスとの境界線が敷かれているのだ。

第17回 「Thanks for キ・ガイ」 8

ロハネに住む住民たちは大概、国際指名手配中の重犯罪人だ。勿論、リカルドもその一人。

ロハネの住民はロハネに居る限り市長の保護（無法地帯の提供による匿い）を受ける事になるが、市長の権力の範囲外、公の場では警察やFBI等に即座に追いかけられる立場にある。

ロハネから一步でも出るとDEAD END

リカルドが今いるのはロハネ、レジがあるのはロサンゼルス。

つまり、リカルドは今ボーダーを踏み越える事なく、ボーダーを越えて遥か先にあるレジに向かわなければならないのだ。

でないとブルーレイが買えない。

するとダウトがガンダムを見れない。

するとダウトがハルヒを見れない。

するとダウトがらき すたを見れない。

ダウトは発狂死してしまうだろう。

さて、リカルドはどうする？

……。

何も手だてがないので、取りあえず目の前の警察官をぶちのめすことにした。

出来立てのアフロで頭をチョップ。

途端、警察官は口から泡を噴いて崩れ落ちた。

よし、これでレジに行ける。

アフロの新しい使い方を見つけたリカルドはボーダーを踏み越えた。

その直後、

ダパパパパパパパパパパ！！

突如前からマイクロウージーの銃弾が飛んできた。

「だわわわわわわわわわわわわわわわわわわ！！」リカルドはとつさにそれをアフロで弾き、慌てて元の場所に戻った。

「何イイイイッ!?」前を向き直したリカルドは絶句した。

ボーダーの遙か向こうでFBIの重武装隊員が隊列を組んでリカルドに銃口を向けていた。

……。

何も手だてがないので、リカルドは取りあえずFBIをぶちのめすことにした。

スリッパを投げた。途端、FBIは唾鼻叫喚の輪舞曲を踊り始めた。

暫くしない内に死屍類々の地獄と化した。

よし、これであつやく……

リカルドがボーダーを踏み越えようとしたその時。

ちゅどおおおおおおおん!!

左の壁から戦車が突つ込み大砲をぶつ放してきたので、アフロで受け流し、また元の位置へ。

米軍隊出動。AKやらUZIやらといった短機関銃を腰に構えた兵が、戦車によつて破壊された壁から絶え間無く溢れ出す。戦闘機の空気を切り裂く甲高い音も聞こえてきた。

なあ、これいじめじゃね？

たかだかスリッパを操れるアフロの中年おっさん一人に米軍一個大隊だぞ？

あれ？目が潤んできやがった。

第17回 「Thanks for キ・ガイ」 11

午後五時。メンバーがそれぞれのモノを買い、車（装甲車）の前に戻ってきた。

ブロンズとアリスは七面鳥。クロアはクリスマスツリー、ダウトはライト。

だが、クロアとダウトは両方安手のモノを買い、余った金で自分達のモノを買っていた。クロアはAVとアダルトグッズ、ダウトはフィギュアとチェーンソー。

「何ですか、貴方達」と、アリス。クロアとダウトの醜態を前に言った。「おつかいもまともにできないとは全く何ですか？」

「うるせえよ、クソロリ」

ダウトを無視し、アリスは説教を始める。

「いいですか。お菓子ならまだしもAVやらフィギュアやらに使うとは……日本の七歳児でもそんなことしませんよ？つまり貴方達は子供以下、すなわちウンコです。」

声は荒げないが、急所を衝き、グサグサと来る説教が続く。説教できるのは、教祖と教徒の主従関係の故。

アリスがウンコの事しか話題に上げなくなっしてから二十分後。

「……………ところで、アフロさんは何処ですか？」

「遅えよ！！」ダウトは思わず突っ込んだ。直後耳が腐るトコだったぜ、と呟いた。クロアも一緒にいたブロンズもだ。

ウンコについてここまで語れる九歳女児は初めて見た、と。

「……………んー…まだアンタのブルーレイ探してんのかもよ？厨二」

「あん？うつせえよ、俺は二次元に生きるって決めてんだよ、バカ」

「アンタ顔はイイんだけどね……………ホント残念なイケメンって感じ」

「黙れバカ。残念でも無念でもいいんだよ、あ」

「何？厨二」

「あれ見ろ」

クロアが振り向くと、夕日の後光が差した巨大なアフロの影が近づいてくるのが見えた。

夕日を背にし、歩むリカルド。ボロボロの体にピカピカのアフロ。そしてその手にはブルーレイ。

彼は一個大隊に勇敢に立ち向かい、見事ブルーレイを勝ち取ったのだ。

誇らしい英雄の勇姿に全米が泣いた。

嘘だ。

装甲車に乗って街を後にし、教会へ戻る。

教会に戻ると皆、せっせとパーティの準備を始めた。

ブロンズは七面鳥を焼き、クロアはディナーの用意をし、アリスとダウトはドレスアップ。ライトと装飾品で着飾ったクリスマスツリーを刺す。

勿論、リカルドのアフロの天辺に、だ。

日が沈み、ようやく準備が終わった。

さあ、パーティの始まりだ。

第18回 「七面鳥とキ・ガイ」 1

豪華な夕食。こんがり焼けた七面鳥の香ばしい薫りがただよう。

その横にはシャンパンの瓶が並び、その横にはワインやらビールやらといった酒瓶が並んでいる。教会を包む夜闇を壁の蠟燭達が優しく照らす……

その食卓を六人が囲む。

……？

六人？

数えてみよう。

時計周りに、ダウト、クロア、ブロンズ、アリス、シェイソン、リカルド……

なんだ、いつものメンバーじゃないか。あっはっはっはっ……

ん……？シェイソン……？

何でお前がここに居るウウウウツツ！！？

ダウト曰く、「楽しい友達連れて来たんだ、いいだろうがよ？」

というワケで、血と臓物による地獄のカオティック感謝祭パーティーの始まり始まり……。

第18回 「七面鳥とキ・ガイ」 2

「うーん！いい匂いですね。ははあ！」シェイソンが嬉しそうに手を叩く。「この度は素晴らしいパーティーに私めをお誘い戴き誠に有り難う御座いました」

シェイソン大喜び。

ダウトも大喜び。

シェイソンとダウトだけ、大喜び。

意気消沈の他メンバー。

せつかく、せつかく、今から陽気にはしゃごうと思ったのに、コ^{エイソン}イツの身に纏う陰悪な邪気のせいではしゃげないじゃないか、と。おまけにその事を口にしたら、殺されそうで恐ろしい。

皆、俯き、黙り込む。

「オイオイ、どうしたんだよ、みんなあ！テンション低いぜ、オラー！」ダウトがそんな皆の顔を一人一人覗いていった。

みんな目が死んでる〜♪

「まあもういいや、ちゃっちゃとおっ始めようぜ！！乾杯！！」

第18回 「七面鳥とキ・ガイ」 2（後書き）

ギャグマンガ日和 パロリました。
すみません。

因みにギャグマンガ漫画もアニメも見たことありません。
二重の意味ですみません。

第18回 「七面鳥とキ・ガイ」 3

ダウトの勝手な乾杯音頭でパーティは始まった。だが、誰も杯を上げない、声を上げない。

暫くの沈黙の後、シェイソンが七面鳥に手を出した。足の部分を千切って手に取ると、マスクを一瞬僅かに開けて食べた。

「素晴らしいお味です」

ダウトがそれに続く。

しかし……。

他のメンバーテンション最低潮。まるでお通夜だ。

「さあさあ皆さんどんどん食べて下さいよ」ついにシェイソンに主導権を握られてしまった。

このままだとパーティがシェイソンに支配されてしまう……！

さあ、どうする？！

まず一番手にリカルドが動いた。

ビールジョッキを片手に立ち上がった。

酔って恐怖を紛らわそうというのだ。

「『イツキ』すつぞ『イツキ』iiiiiiii!! 皆の衆!! 盛り上げてくれええええ!!」

スター気取りで叫ぶと、ジョッキの縁に唇をつけた。

次の瞬間、シェイソンが再びメスを投げた。

「きゃあー！」 餌食になったのはアリス。どうやらMDMAを飲もうとしたところ、メスで錠剤を射抜かれ、止められたらしい。

「危険薬物摂取は大変危険です。ダメです、ゼツタイに。……もしや貴女、常習犯ですか？ ならば、体がどこか悪いのでは……？」
シェイソンはまた立ち上がった。「手術をしましょう」

「きゃあああああああー！」 シェイソンに襟を掴まれ、祭壇まで引きずられるアリス。祭壇の脇の、廊下へ続くドアに消えると、そのまま戻ってこなくなってしまった。

暫くすると、シェイソンだけが席に戻ってきた。

「長らくお待たせ致しました。さて、続けましょう！」

先ほどまで騒いでいたダウトもタダ事ではない事を察知し、黙るようになってしまった。

ここでクロアが動き出した。

シェイソンの支配下から脱するための良案が思い浮かんだらしい。

彼女は突然立ち上がると、皆の前でもむろに服を脱ぎ始めた。紅潮して目を背けるブロンズとダウト。だがシェイソンはまじまじと注視していた。

ついにクロアは全裸になると、シェイソンの巨体に寄りかかった。「…あれえ、おかしいですねえ？アタシに欲情してるんですかあ？溜まつてるんですねえ？」クロアは艶笑しながらシェイソンの股間を優しく揉んだ。「手術しよ♪」

クロアはシェイソンの白衣を引っ張って祭壇に上がった。そして二人は祭壇の脇のドアへ消えていった。

……。

とうとう席に残るはダウトとブロンズ、二人だけとなってしまうた。

「おい、ブロンズ」

「何だい？ダウト」

「これが感謝祭ってヤツだぜ」

「いや、違うでしょ！！」

1

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 2

市長の電話でロハネ唯一の公園に集まったブロンズ達。

チャップ公園。そこは、三百メートル四方の大きな公園で、ロハネの面積の約六分の一を占めている。木に囲まれたこの公園の中央には池があるが、寒さで氷が張っている。尚、市長がたまに朝、ジョギングをしに来るらしい。

皆が敷地に足を踏み入れると、ダウトがいきなり奇行に走った。

「ヒヤアアハハハハハハハ！雪だ雪だ雪だああああ！！」ほふく前進しながら積もった雪をむさばり喰い始めた。「雪って旨えなあああ！！ヒヤッヒヤハハ……腹痛ええええ！！」

飛び上がり、慌ただしく辺りを見回す。「トイレ！！トイレはどこなんだああああ！！」

しかし、いくら見回し走っても一向にトイレが見つかる気配はない。

そうこうするうちに、限界が。

「ああああああ！！畜生おおおお！！」最後の手段、とダウトは背の高い草むらの中に身を潜めた。

野グソだ。

ブロンズ達の耳に不協和音のハーモニーが流れる。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 3

悲劇のダウトを尻目に公園を散策すると、市長がリコリスと仲良く雪だるまを作って遊んでいるのを見つけた。

「おお、来たか来たか」市長は皆を見つけると言った。

「何が来たか、だよアンタ。雪合戦なんかでアタシら呼び出して」「いやあ、この雪見てたらつい…な」

「アンタは小学生か」

ここでリコリスが話に割ってきた。

彼女は睨むクロアの胸ぐらを掴み、鷹のような鋭い剣幕で睨み返した。「市長様は小学生ではない、幼児だ」

「うん、幼児だね」と、クロア。

「ああ、幼児だ」と、リコリス。

二人は友情の握手を交わした。

閑話休題。

あその後でリコリスが市長の痴話を延々と暴露し、市長がメソメソ泣き出したあたりの話は省く事とする。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 4

雪合戦の下準備が始まった。

決められた制限時間（30分）内に各チームで雪を固めたシエルターを作っていく。

合計七人のメンバーは三チームに分かれ、戦うこととなった。

チーム1 市長、リコリス

チーム2 クロア、リカルド、アリス

チーム3 ダウト、ブロンズ

……。

非力なブロンズと野糞のダウトを組ませたのは市長である。

準備が始まると、涙目のブロンズは真っ先にシエルター作りを放棄し、異臭を頼りにしてダウトの所へ向かった。

すると、ダウトはまだ草むらの中で野糞をしていた。

心なしか、草むらの中から呻き声が聞こえてくる。

大丈夫？、とブロンズが聞くと

今ピーク、との返事が。

さあ困った困った。

このままではブロンズはリンチに遭ってしまふ。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 5

取りあえずブロンズはダウトを放棄し、シエルター作りに励む。

「ああああ。負けちゃうよ負けちゃうよ。こんな絶対無理だつてば……」ばやきながら、雪を手で固めていく。

だが、彼一人ではどうすることも出来なかった。

「三十分だああああ！手を止めるお！！」

「早いってば！！」市長の号令に従ったブロンズ。結局一枚しかシエルターを作れなかった。

凄く心許ないけどこれで頑張るか、とりあえず意気込む。周りを見る。

すると、みなさん沢山作っていらつしやった。

市長チーム五枚。クロアチーム九枚。

圧倒的状況にブロンズは泣き叫んだ。

と同時に、ゲームが始まってしまった。

「ぎゃああああああああ！！」一瞬にしてブロンズの目の前に無数の雪玉が迫ってきた。

とっさにシエルターに隠れ、これを避ける。

「ー危なかった……！」

胸を撫で下ろす。

だがその直後、不穏な音がブロンズの耳に入ってきた。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 6

雪玉が木にぶち当たった音だった。

ガチュッ！！

明らかに雪のものではない。雪玉は弾けると、中から出た石ころが跳ね返り、落ちた。

――石入りだあああ！！

しかも、見ればそこら中石だらけ。

どうやら、先ほどブロンズを襲った雪玉は全弾石入りだったらしい。

――殺される！！

ブロンズは身震いした。

くそ、このままじゃアリンチに遭うのは確実だ。
応戦しないと！！

ブロンズはシェルターを背に、雪を固めた。
手のひらサイズの雪玉が十数個できた。

よし、反撃だ！！

シェルターから顔を出し、雪玉を構えたその時。

「あちよー！！」

突如、市長がブロンズに突っ込んできた。
丸まると太った体軀で飛び込みタツクル。

「いやあああああああ！！」

ブロンズ唯一のシエルターが一瞬にして粉微塵に粉碎された。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 7

さあ、これでブロンズの身を守る物は無くなってしまった。

「うわあああああー!!」

ブロンズが手に持っていた雪玉を投げる、投げる。

市長が身軽なフットワークで避ける、避ける。

「リコリス!!」

市長が叫ぶと、彼の後ろで待機していたリコリスが応えた。

「はい。……少々哀れだが、死ねええええ!!」

彼女は鬼の形相でブロンズに雪玉を投げた。

……!

いや、雪玉ではない。

雪塊だ。

直径二メートルの巨大な雪塊がブロンズに迫る。

避けようとしていたブロンズ、これはさすがに無理だった。為す

術もなくこれが直撃した。

「ぶぎゃあー!!」ブロンズは吹っ飛ばされた。

地面を二転三転し、ようやく止まった。

それを見て、市長は爽やかに微笑んだ。

「よし、君には更なる地獄を見せてあげよう」

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 8

「リコリス!!」市長がまた叫ぶと、リコリスが再び雪塊を投げた。

地を転がってギリギリかわしたブロンズ。

しかし、直後市長が地面を蹴って彼に雪煙を喰らわせた。

「うわっぷぷ……!!」口の中に入ってきた雪を吐き捨てる。

すると、今度は市長が雪塊を放った。ブロンズの頭目掛けてダク。

ブロンズは雪に埋もれてしまった。

ナイス・コンビネーション。

微笑み合う二人。

「市長様、今日も絶好調ですね♪」

「君もだね、リコリス君♪」

「市ー長♪」

「リーコリス♪」

「市ー長♪」

「リーコリス♪」

踊り戯れる二人に雪玉が。二人はこれを避けた。

「アンタら、何アタシのロメオを虐めてんの……?」雪玉は怒りで真っ赤のクロアが投げた物だった。「ホントもう容赦しないよ……」そこにリカルドとアリスが加わる。

「油断するんじゃないぞ、ビッチ。奴等はプロだ……」

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 9

「プロ……って何？」

「ああ、プロさ。知らなかったのか？全米雪合戦選手権で一位」

「ふうん……えっ、マジ？」

「マジ」

一瞬で真っ青になってしまったクロア。

「……俺、手加減してくれるかな、と思って連れてきたんだが……すまん。アーメン」

「先言ってよ……」

三人の前に立ちただかる市長とリコリス。互いに黒い笑みを交わしながら迫ってくる。

「ちよつとどうすんの、インポ？！ヤバいつて！！」

「まだ希望はあるさ、見ろ！！」リカルドが自らの足元を指す。
何とアリスが覚醒剤を吸っているではないか。

「あべべ。あべべべべべべ！！雪合戦たのしいれすうう！！」

アリスは足元の雪を掬い上げ、瞬時に雪玉を作ると、猛然と投げた。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 10

しかし、弾は全てあらぬ方向に。また投げるが、クロアの顔面に直撃。

「ごめん、インポ。コイツに期待なんかしてない」

次の瞬間、狂乱するアリスが雪塊に吹っ飛ばされた。

「私の前でおしゃべりする余裕はどこにあるのかな？……リコリス！」

「はい。アヤツらには雪達磨になつてもらいましょう」また雪塊を投げる。

それをリカルドがアフロで弾く。

「ビッチ！！攻撃は任せた！！」

「わかったよ」市長の方へ走るクロアは片手で雪を掬い上げた。

「私に勝てるだけでも！？」仁王立ちして構える市長。嘲笑をかます。

クロアはその顔面目がけて、雪玉を放った。

直後、

「ポウ！！」

なんと、突然市長がムーンウォークを始めた。

雪玉が避けられた。

市長のムーンウォークは、かの高名なマイケル・ジャクソンを遙かに凌駕したクオリティーだった。

雪原を滑るようにスーイスイ。

「芸術だ……！！」それを見たりカルドが唸った。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 11

構わずクロアは投げ続けるが、市長がムーンウォークで避け続ける。

「動きが読めないッ……！」

クロアは絶句した。

直後、彼女に迫る白い影……。

リコリスの雪塊。

「死ねええ庶民……！」

「イヤああああ……！」直撃。吹っ飛ばされて気を失った。

「さて」市長がムーンウォークを止めてリカルドの方を向いた。

「あとは君一人だ、リカルド君。どうするね？」

しばしの沈黙。

「……スリッパ……」

「何だね？リカルド君」

「スリッパ使わせてくらひゃい……」

「だーめ」打ち震えるリカルドの顔面に、市長は直接雪塊をぶち込んだ。

ゲーム・セット。

第19回 「久しぶりにキ・ガイ」 12（前書き）

ホームページ更新しました。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 12

また暫くの沈黙が続いたあと、市長が口を開いた。

「さて、帰るぞ、リコリス君」

「はい、市長様」

市長とリコリスが突っ伏したリカルド達を背に、公園を後にしようとした

その時。

「待てよ、まだ勝負は……終わっちゃいねえぜ……？」

「……！！」二人が振り向いた丁度その前方にダウトが立っていた。

顔面蒼白、なぜかやつれた調子のダウトがまた口を開く。

「俺様にも……必殺技……あるんだぜ」ヒヒヒヒ、と笑う。

そして、右手を差し出して、見せた。

「俺様の……特製雪玉だぜ……」

手のひらの中には雪玉というには余りにも茶色がかつた球体があった。異臭を放ち、周りで小蠅が周回する。

そう。
人糞だ。

もちろん、ダウトの。

「テメーらまとめて死んじまええええええええ！」ダウトは叫ぶと同時に、信じられない勢いで市長達に向かっていった。

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 12（後書き）

最近新しい小説書き始めました。

「FUCK・N BRAT」

異世界転生モノです。

殺人鬼パラダイスですが。

是非とも宜しく願います！！

第19回 「久し振りにキ・ガイ」 13

さあ、ダウトは最終兵器を振りかぶった。

自分の好感度を犠牲に、喰らった相手の精神に大ダメージを与える、諸刃の剣だ。

「なあああ！？リコリス！！」

「お任せあれ！！」市長を庇うようにしてリコリスが立つ。「市長様は必ず私がお守りします！！」

リコリスは叫んで足元の雪をこっそり掬い、素早くそれを固め雪塊を作る。今までで一等大きい雪塊だ。

そしてそれを投げた。

「死ねええええええええ！！」

雪塊は一直線にダウトの顔面目掛けて飛んでいった。

もう逃げられない。

目前まで迫った雪塊を目にしたダウト……。

次の瞬間、

ダウトはサイドステップを繰り返して、超高速でこれかわした。

「何イイイイイ！！？」驚愕する二人を中心にダウトはサークルング・ステップを踏み、円を描くように回る回る。

攪乱させたところで一気に飛びついた。

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 1

突然だった。

雪合戦の三日後の朝、発破屋Mr・Jがエンズ・クライシスト・チャーチに慌ただしく入って来た。

「ボーイズ&ガールズ！！大変ネー！！」

何だ、朝から騒がしい、と礼拝堂でビールをあおっていたリカルドが面倒臭そうに言った。

「ミーの店がバケモンにぶっ壊されたのネー！！」

一瞬冗談かと思ったが、見れば、Jの顔は相当に青冷めていた。

——これはタダ事じゃあねえな……！！

リカルドは装甲車を走らせ、現地へ向かった。

果たして、店はJの言った通り、ぶち壊されていた。

店が半分、塵芥残さずに消えていた。

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 2

そしてその日の夜。

皆が礼拝堂でくつろいでいると、突然クロアの携帯が鳴動した。相手は市長だった。

「なあに、アタシに今夜の相手をしてほしいっての？」

「違う！！緊急事態だ。この電話が終わったらすぐさまそこに居る皆に伝える」

「はあい、で、何？」

「バケモノが現れたんだ！！」

「はあ！？」

「レグニノ教は知っているか？」

「……知らない」

「……まあ知らないのも無理ないだろう、四日前にこの街に出没した、ロシア発の悪魔崇拝宗教団体だ。そこでミサを行った連中が昨日、本物の悪魔を作って暴発させてしまったのだ」

「あつそ、ふーん。で？」

「この化け物の討伐を命ずる」

「やだ」

クロアは電話を切った。

すると、アリスが訊いてきた。

「誰と何を話してたんれすか？」

「ああ、とうとう市長までアンタと同じヤク中になっちゃったらしいよ」

「仲間が増えてよかったれす～～わひゃわひゃ」

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 3（前書き）

ホラーとファンタジー要素
少しだけ入れまゝす

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 3

千鳥足アリスが陽気にヘラヘラと笑った。

直後。

礼拝堂の扉が独りでに開いた。夜の闇に照らされ、きしみながら、少しずつ僅かに開いた。

建て付けが悪くなったのか？

「ビッチ、すまんが閉めてこい。隙間風が入る」

「はいはい」

リカルドが震えたのを見て、クロアは開いた扉を閉めに行った。すると、

――お姉ちゃん

と、聞こえた。

開いた扉の隙間から、見知らぬ少年がこちらを覗いていた。少年は全身に黒い粗布を巻いていた。

――お姉ちゃん

「何？かわいい坊ちゃん」繰り返す少年にクロアは聞いた。

――近くに宿屋ってある？

少年は聞いた。

「ないよ」とクロアは即答した。ロハネ唯一のホテル、ミス・ロハネはクロアとダウトが既に爆破してしまっていた。

少年は当惑した様子を暫く見せて、間を溜めると、また聞いた。

――じゃあ、
今晚ここに化け物^{ほく}を泊めてくれる？

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 4

「ねえ、まさかアンタ……」クロアは恐る恐る扉を開けた。

――キシタンは死ね

ドアの向こうには文字どおり、闇が渦巻いていた。少年の体で生き物のように蠢く影。

それを見たクロアは反射的に少年を撃った。

マイクロウージーで蜂の巣にした。

うるさい銃声が教会内に響きわたった。

「うわあああ――！」教会机の下に隠れるブロンズ。

「わひゃあ、パーティですう」ミニガンを構えるアリス。

「ヒヤハア！」興奮して飛び上がるダウト。

「何だ！？」動揺するリカルド。

「あ……はあ……あ……」少年に首筋から血を吸われるクロア。

少年の顔にはウージーの大量の弾痕が。しかしそれがみるみる消えて無くなっていく。傷口から噴出していた血も収まっていた。

少年が離れるとクロアが崩れ落ちた。ピクリとも動かなくなった。

――さあてと、楽しい食事をしようかい

少年はクロアを踏み越えると、不敵な笑みをこぼし、こちらに近づいてきた。

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 5

「ーねえ、君達が死んでくれれば僕はここでタダで泊まれるんだよね？」

「オイ、ガキ」ダウトが少年を呼び止めた。「これあコメディー小説だ、テメエみてえなファンタスティック野郎が出るようなもんじゃあねえんだぜ？」

ダウトは言うつと、高く舞い上がった。全体重を掛け、少年の頭をバットで割った。

陥没する頭蓋。脳髓が沸いて出た。

だが、少年はダウトに微笑みかけるだけであつた。

「ー僕は直接心臓を握り潰さないと死なないよ？」

少年が拳を振り上げた、瞬間。その拳が爆散した。爆炎の中から赤い肉片が飛び散った。

「ファンタスティック野郎……略してファンタ」リカルドのグレネードマグナム。最近はスリッパがメインだったので使うのは久々だ。「糞ファンタは呼びびじゃねえんだよおお！！帰れ！！」

今度は少年の頭が吹っ飛んだ。だがなんとその直後、一瞬で首から無くなった頭が生えてきた。

「ー痛いな、もう」

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 6

「みなひゃん、どいてくらひゃい」

アリスがミニガンをぶつ放した。

少年が蜂の巣になりながらふっ飛ばされていく。

五百の装弾数がゼロになったとき、少年の姿はなかった。

肉体が肉塊になり、肉塊が肉片になり、肉片が肉塵となって目に見えぬほどに粉微塵にされたのだ。

しかし数秒後、肉塵が肉片になり、肉片が肉塊になり、肉塊が肉体となって、少年の姿が現れた。

――無駄だって

「吸血鬼が貴様はあああああ!？」リカルドが唸ると、

――そうだよ

と、少年が返した。

――どうしたの？終わり？弾切れ？

「弾はいくらでもありゆれひゅ」アリスがミニガンに新たな弾を装填した。

その直後、

途轍もない轟音が。

見知らぬ戦車が教会の壁を破り、突っ込んできた。

「あちよー！」

奇怪な叫び声が聞こえたと思うと、戦車の砲口から閃光が放たれた。

少年の体がバラバラに吹き飛んだ。

「大丈夫か、庶民共？」砲身の蓋からリコリスがヒョコリと顔を出した。「電話を途中で切るな。市長様がお怒りだぞ。ほら、貴様等も撃て。死ぬぞ」

見ると、少年は早くも肉体になりかけていた。

それをリカルド、アリス、リコリスが撃つ。

リカルドのスリッパ、マグナム。

アリスのミニガン。

リコリスの砲撃。

爆音行進曲がしばらく続いた後、皆が撃つのを止めた。

少年が消えた。

完全に。

虚空から少年の肉片が生成されなくなった。

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 8

「逃げた……か」リコリスが戦車から降りた。

「おいおいおいおい！何なんだ！？ありや一体！？」

「待て、まだ始末を付けなきゃいけないのが一人残ってるぞ」リコリスはリカルドを制止すると、うつ伏せに倒れたままのクロアを指差した。

見ると、動かなかった手足が徐々に動き出し、ゆっくりと立ち上がった。

少年は自身を吸血鬼と称していた。
ならば吸血鬼に咬まれた非童貞・非処女の人間の体は……

「あーもー何かしんどい。腰ダルいよ」クロアはごく自然に面倒臭そうにおどけて見せた。

全員が胸を撫で降ろした。

「ゾンビにナース服着せるのはさすがにやだぜ……」と、ダウト。彼が一番安心してゐるに違いない。

だが、異変はすぐに勃発した。

「あれ……？体が熱い……」服の胸元を開けるクロア。「やけにムラムラする……」

ふらふらと明後日の方向へ歩きだした

次に彼女はとんでもない事を口にした。

「……アフロおゝ。アンタとやらせてよお」

「俺はインポだあああああああ！！」

「どうやらあの少年の唾液には媚薬効果があるらしいな」と、リコリスが呟いた。

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 9

「んじゃダウト」

「イヤじゃあああああああ！」「ダウトは逃げてしまった。オタク故、二次元は網羅しているが、三次元の事になると、極めて疎い。

「あゝアタシのロメオ、どこ行っちゃったの……？」
獲物を探してさまよい歩くクロア。

教会机の下に隠れたまま戦車の砲撃音で気絶してしまったブロンズ。

このままじゃマズい事になると感づいたリコリスがクロアを止めに入る。

「やめろビツチ。理性を働かせろ。本能に……」

「なあに？アンタがアタシを慰めてくれるの？」

「もう駄目だ、コイツ！！」背筋に悪寒を走らせたリコリス。半泣きになりながら時速五百キロでリカルドの背に隠れる。

「はははははは早くあの暴走バイを止めてくれ！！」

「バイっていうのはバイクの略じゃないよな！？」

第20回 「キング・オブ・キ・ガイ」 10

そんなこんなしてる内にクロアがアリスと絡み始めた。

「さあて、お着替えの時間ですよーアリスちゃん」

「わひゃわひゃ、」

恍惚クロアがアリスの服を脱がしていく。

これを見た途端ロリコンリカルドが突然に発狂した。

「俺のアアアリスたんが汚されていくうううううう！！」

赤黒い憤悶を纏ったスリッパが音速のスピードでクロアの側頭部に命中した。

クロアはロケットのように飛んでいき、教会の天井にぶつかるどさりと地に落ち、床に叩き付けられた。

ピクリとも動かない。血溜まりが出来る。

スリッパがリカルドの手に戻ってくる。

……………。

「……………あれ？殺っちゃった？」

「救急車アアアアアッ！！」リコリスが慟哭を上げ、携帯を懐から取り出す。

数回のコールの後、電話が繋がった。

「ーもしもし、こちら聖ヨハネ・ブリッツ病院ですが。

「今すぐこつちに救急車をよこせ!!」

「ー落ち着いて下さい。何があったのですか？」

「変態が一人死にかけている!! さつさとよこせ!!」

「ーわかりました。少々お待ち下さい。

その2秒後。

「すみません、検診に参りました」院長シェイソンがリカルドのアフロの中から顔を出した。

「早ああああああッ!？」驚くりコリス。だが、一番驚いているのはリカルドだった。

何しろ、自分のアフロの中から人が出てきたのである。

「な……なななな何で手前が俺のアフロから……!!？」

「感謝祭の時、貴方のアフロをちよつといじらせて貰いました」
と、シェイソンが何やら楽しげに言うので、もしかと思ったリカルドは

「……アリスたんには何か改造したのか？」と聞いた。

すると、シェイソンはこう切り返した。

「おいしかったです。」

「既に汚されてたああアアアッ!!!」リカルドは勢い良く吐

血して失神してしまった。

第2回 キチ・イわひゃわひゃキャラコン 開催！！

えゝまた始まりました、キャラコン。
付き合って頂けたら幸いです。

今回の栄冠は誰の手に！？

投票する際は感想ページに飛んで感想に書き込みして下さい。

1位、2位、3位と好きなキャラの名前を並べてレッツ投票。
(理由など書いて頂けたら作者大喜びです)

一応、候補キャラ。

- ・ブロンズ 我らが主人公
- ・クロア 史上に名を馳せるエロヒロイン
- ・ダウト ヲタ厨二殺人鬼
- ・アリス ヤク中ロリ教祖
- ・リカルド ロリコンインポアフロ
- ・市長 あちよー。
- ・リコリス 上の秘書
- ・シェイソン 謎の病院長
- ・Mr・J 爆弾屋の店主
- ・デイビッド 第二のスリッパ使い
- ・ケビン大司教(故)
- ・ハウエル(故)
- ・アンドレ(吸血鬼少年の名)

1位15pt 2位10pt 3位5ptでランキングを付けさせて貰います。

僕の予想では……最近はずっちゃんけ過ぎたあの人でしょうか……。

ご投票お待ちしております!!

第2回 キチ・イわひゃわひゃキャラコン 開催!! (後書き)

投票締め切り

2012年1月10日

「なろう」に入っていない方も気軽に投票できます!!

第21回 「キチ・イの居ない世界なんて無い」 1

「ねえ……ちょっと何コレ」

クロアが愚痴る。

彼女は気が付くと病院のベッドに手足を拘束具で固定されていた。

「ヒヤハハハハハ！動けねえだろ！？」もがくクロアの顔を覗き込むダウト。ムカつく程のニヤけ顔だ。「テメエはしばらくソレって事になったから」

「ハア？拘束プレイ？あつ、濡れちゃった」

「コンの糞馬鹿ド変態。まあしゃーねーか」

気付くと、クロアはブロンズ、リカルド、アリス、ダウト、リコリスに囲まれていた。

そこにシェイソンが加わってきた。

「大丈夫ですか？クロアさん」

「この拘束具どけて」

「ダメです」シェイソンは近くにあった丸椅子に腰掛けた。「さて、例の怪物のお話ですが、リコリスさん」

「ああ。とんだキチガイだ。アレは。S級だ」リコリスが眉間を寄せる。

第21回 「キ・ガイの居ない世界なんて無い」 2

「奴の名はアンドレ。アンチキリストの悪魔崇拜宗教から生まれた怪物だ」市長もMr・Jと共に現れた。

狭い病室に9人。ギユウギユウ詰めである。

市長が続けた。

「聞きたまえ諸君。この怪物を早急に駆逐しないとこの街が大変な事になる」

「大変な事……って一体何？」ブロンズが聞く。

すると、市長はベッドのクロアを指さしながら言った。

「街の全員が変態になってしまうのだ」

「あはは、いいじゃん、夢キユンワールドじゃん」

「お前だけのな」ときめくクロアの頭をリカルドが殴る。「つまり、アイツに噛まれたら変態になるっ！事か？市長さん」

「そう。奴の唾液の中には媚薬が入っているのだからな。それも効果が永久的に続く媚薬だ。ゾンビがエロくなったバイオハザードを連想すれば大体合っている。きつとおおよそ一週間足らずでここはラクーンシティと化すだろう」

第21回 「キ・ガイの居ない世界なんて無い」 3

「……すでに変態で良かったな、ビッチ」

「あはは、まーね」リカルドの台詞に頷くクロア。

「性質が悪いのはここからだ、諸君」市長に注目する一同。「奴は吸血鬼なのだ。心臓を直接身体から抜き取らなければ死なない」

「ミーの二ト口爆弾でも死なないってゆー事かい!？」うなだれる」。

「そうだ、」君」

「ハン、格闘戦をしろってんだろ!? 俺様の得意分野だぜ」

「もちろんそうなのだがね、ダウト君。奴のパンチは家屋を半分吹き飛ばす程の威力だ。往けるかね？」

「……上等だぜ」ダウトが自信なさに拳を固めた。

「そういう訳で、アリス君のミニガンも、リカルド君のスリッパも、」君の手榴弾も、奴の前では気休め程度の物にしかないのだ」市長が声を大きくする。「諸君。奴は狩らねばならない。口ハネの存続の為に。この小説がコメディであり続ける為にもだ。協力という言葉はこの地では死語ではあるが……」

皆、共に戦おうではないか。

市長の出した手に、八人の手が乗った。

第21回 「キ・ガイの居ない世界なんて無い」 4

ところで、話は切り替わる。

我らが主人公、ブロンズ君もその場の空気で駆逐作戦に加担する羽目になったのだが、

「うわあ、しまった。音速でドイツに帰りたい。と、死ぬほど後悔していた。」

作戦会議を終え、市長、リコリス、J、シェイソンが帰り、いつものメンバーになると、ダウトがブロンズの肩に背後から手を乗せた。

「お前……銃って撃てんのか？」

「ううん、全然。」

「喧嘩とか経験無えのか？」

「実家が農家だったから……ニワトリとかと」

「よし、明日は射撃場だな!!」

「うえええ!？」

作戦開始は明後日の午後九時。

それまでに物語が始まって以来何一ついいところを見せていない非戦闘員ブロンズを戦えるようにしなければ……。

第21回 「キ・ガイの居ない世界なんて無い」 5

という事で射撃場。

ロハネの中心街の一角にあるビルの中で、元傭兵のルイス店長によつて営まれる室内競技場で、アリスの行き付けの店である。

ビルの中に入ると、早速ルイス店長が迎えた。

「ういつす、アリス。今日は何の用だ？」中肉中背の白人。落武者みたく真ん中でキツチリ分けられた白髪が頭に被ったキャップの左右からはみ出している。丸縁サングラスをかけ、ジャンパーをだらしなく着こなし、壁に頬杖をつく。

「アリス。その坊子は何？誰？」アリスの後ろに居たブロンズを指差す。

「ああ、今日は彼に銃の撃ち方を教えに来たんです」

「ブロンズです。よろしくお願いします」

「チョリつす」ブロンズとルイスが握手を交わす。

「うつし。早速だが、ブロンズ。銃って何だと思うよ？」

ルイスが問うたのでブロンズは少し考え、答えた。

「……危ない物」

「ブー。違う。……答えはチ・コだ」

場が凍り付いた。

第21回 「キ・ガイの居ない世界なんて無い」 6

「いいか、ブロンズ。よく考えてみる。両方、そっくりじゃないか。銃とチ・コ。銃口から発射される弾丸、銃身から放たれる銃声……装填し、狙いを定め……撃つ!!」

ブロンズは思った。

この人頭おかしいんじゃないか、ともはや病気としか思えなかった。

こいつは宇宙人だ、と何度も頭の中で唱える。

ああ、クロアと同じ匂いがする……。

「どうだ、すんばらすイーとだろ？」

「わかりません」

「なんでこれがわかんねえんだ、しっかりしろ!!」

「あなたこそ」

ルイスはやや興奮気味に唸った後、叫んだ。

「よおし、お前にチ・コの素晴らしさを教えてやる!!」

「うぎゃああああああ!!」

第21回 「キ・ガイの居ない世界なんて無い」 7

「止めてください、ルイスさん」ルイスに制止を掛けるアリス。
「彼は銃を学びに来たんです。股ぐらについて学びに来た訳じゃありません」

「でもよ、チ・コには銃に繋がる点が……」

「ありません。黙りなさい、変態」

「うえーい」

アリスが睨み付けると、ルイスは引き下がっていった。

「さて、ブロンズさん。銃のレッスンをしましょう」

「はい」

ルイスに入場料を払い、ロビー奥の廊下を進むと射撃場に出た。
射撃場は十のレーンに分かれ、それぞれのレーンに的がある。的との距離は二十五メートル。運良く無人でアリスとブロンズ以外客は居なかった。

アリスは受付で競技用ピストル二挺を頼み、ブロンズの所へ持っていくた。

「まずこれで練習しましょう」

アリスはそう言ってブロンズに一挺手渡すと、早速的に向かって適当に三発撃った。

全段命中。内一つは的のド真ん中を射抜いていた。

「いいですか、ブロンズさん。銃で一番大切なのは勘です。勘を養うには訓練です。訓練に訓練を重ね、その上にまた訓練を重ね、そして訓練を重ねるのです」

ブロンズは作戦に参加したのを酷く後悔した。

「それでは撃ち方から参りましょう。まず、こっやって構えて……」アリスが手取り足取り銃の構え方を教えに入った。

耳栓を付け、両手でグリップを握り、銃身を水平に保つ。二つの照準を頼りに的の真ん中を狙って………撃つ………

乾いた銃声が鳴り響くと、的の中心に丸い小さな穴が開いた。

「上手じゃないですか！！ブロンズさん！！」

はしゃぐアリス。だが、ブロンズから返事が来ない。

何かに身を震わせ、腕をだらりと下げ、ピストルを床に落としていた。

しばらく沈黙が続いた後、ようやくブロンズが口を開いた。

「……肩………外れた………」

その後、ブロンズは両肩脱臼で二日入院する事となった。
勿論、クロアと同部屋で。

第22回 「キ・ガイ of the City」 1

その日の深夜。

怪物アンドレは、口ハネを抜け出し、口サンゼルス街を歩いて
いた。

光り輝く照明の群れに囲まれ、素っ気なく雑踏を抜けながら、歩
いていた。

やがて、狭い路地に入った。

薄暗がりのすぐ奥で数人のギャングがこちらを睨み付けていた。

素通りしようと試みたが、すれ違い様、肩を掴まれた。

「オイ、黒い坊ちゃん。こんな遅くにうろろしちゃあ危ないぜ
え？」

ギャング達がゲラゲラと汚く笑った。

「俺たちみたいなお、悪い兄ちゃんがウヨウヨしてるからよオ」
また笑った。

「ギャハハ、お前結構可愛いじゃん！女みてエだ！！」

「どうする？こういうのが趣味の変態野郎のトコにでも預けと
こうか！？」

「ゲヒヤヒヤヒヤ！！」

顔を覗き込んだ連れのギャングがまた笑う。

――ねえ、もう行っていい？

アンドレが無視して行きかけると、腕を掴まれた。

「どこへ行くこうしてるんだよ、坊ちゃん。君はこれから変態がい
っぱい集まる場所へ行ってお尻の穴にぶち込まれなきゃいけない
なったのに、いったい全体どこに行こうしてるんだよ、ええ？」

振り返ると、ギャング達がナイフを持ち、待ち構えているのが見
えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8929r/>

CRAZYYYY STUUUUNT!!!!

2012年1月10日16時45分発行